

今日の福音には、連続するようにして、三つの場面が語られています。最初の場面には、ファリサイ派の人々に問答を挑まれ、それにお答えになるイエスのみことばが響いています。それに続く場面では、家に戻った弟子たちだけに、ファリサイ派の人々に向けて語られたのと同じみことばを語り聴かせるイエスのお姿が示されています。けれども、今日の福音はそこで終わってはいません。今日の福音の最後の場面には、その前の二つの場面とは全く雰囲気異なる、子供たちを抱き上げ祝福してくださる、慈愛に満ちたイエスのお姿が示されています。

今日のミサの中で、今私たちが聴いた福音を一まとまりの今日の福音として受け止めるとき、それは、どのようなことを私たちに語りかけてくるでしょうか。ファリサイ派の人々との問答と、それに続く弟子たちとの質疑応答のすぐ後に、子供たちに囲まれて祝福を与えるイエスのお姿を示す今日の福音の意図は、どのようなことを私たちに語ろうとしているのでしょうか。

ファリサイ派の人々との問答における、一切の妥協を許さないイエスの舌鋒の鋭さと、子供たちを抱き上げて祝福してくださるイエスのお姿の間には、弟子たちにとってだけでなく、私たちにとっても、にわかには計りがたいイエスをいうお方のお心の振幅の大きさと幅の広さが示されているように感じられないでしょうか。私たちが信仰においてそのみ後に従うイエスというお方は、弟子たちにとってそうであったように、私たちにとっても、常にその時その時の私たちの理解の範囲を越えて、私たちを導く私たちの主であり続けられるのです。

「子供たちを私のところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのような者たちのものである。はっきり言うておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることが出来ない。」今日の福音の全体の中で、あらためてこのみことばを味わうとき、私たちに馴染み深いこのみことばは、新たな気づきを私たちにもたらします。ここでもイエスは神の国について語り、私たちをイエスがもたらされた神の国へと招こうとしておられるのです。イエスの神の国の福音は、イエスのみことばによって私たちにもたらされています。福音書に記されているイエスの全てのみことばは、私たちがそれを受け入れることによって、イエスがもたらされた神の国に入ることが出来るために語られているのです。ファリサイ派の人々と弟子たちに向けて語られ、私

たちが今日のミサの中で聴いたみことばもそのようなみことばです。そのように受け止めるなら、今日の福音の前半の、弟子たちにとってだけではなく、私たちにとってもあまりにも厳しく思われるみことばについても、イエスは、子供のようになってそれを受け入れる人にならなければ決して神の国に入ることはできないと言われているのです。

イエスの今日のみことばをそのように受け止めなければならぬとすると、私たちは暗澹たる思いに突き落とされることになるかもしれません。今日のイエスのみことばは、私たちにはあまりにも厳しすぎると言わざると得ない現実の中に多くの私たちは生きていますからです。私たちは、多くの場合、決して子供のようになって、一からやり直すことなど出来ない状況の中に置かれているからです。

けれども、私たちの現状がもたらすそのような暗澹たる思いの中で、私たちの中から湧き起こってくるイエスのみことばに対する反発を鎮め、弟子たちがそうしたようにイエスのもとに留まって、子供のようになってイエスのみことばの真意を尋ね続けなければなりません。イエスのみことばは弟子たちにとってそうであったように私たちにとっても子供のようになって、そのままそれを受け入れるにはあまりにも厳しく思われるからです。

イエスは、波立つ私たちの思いを鎮めるように、今の私たちの現状がどのようなものになっていようとも、「初めからそうであったのではない」と語りかけ、諭してくださいます。今の私たちの現状が、私たちにとってどのようなものとなってしまっているとしても、イエスは「初めからそうであったのではない」と言ってくださいます。このイエスのみことばに導かれて、私たちの「初め」に立ち戻る事が出来たらと思います。

今私たちがその中に生きています生活には「初め」があったのです。先週の日曜日、高円寺教会の私たちは小暮神父様の司祭叙階と初ミサのお祝いをいたしました。司祭なって四十年以上経ったこの私にも司祭に叙階された日があったのです。司祭として生きてきた現実の中の自分が今の自分にとってどのようなものと思われようとも、今日の福音を通して語りかけてくださるイエスは常に「はじめからそうであったのではない」と語りかけてくださいます。そのようにして、あの初めの日に立ち戻るように呼びかけてくださるのです。

結婚されている皆さんにとっても、そのような初めの日があったはずで、あの初めの日、二人が夫婦となったことの結果としての今の家庭生活の現実の全てを見通す事が出来ていたなら、おそらく多くの皆さんは結婚に踏み切ることが出来なかったかもしれません。司祭としての生涯を生きるにしても、結

婚して夫婦の絆に結ばれて人生を歩むにしても、私たちはあの初めの日、子供のようになって、あの初めのときから始まった今の私たちの現実の全てを受け入れたのです。あのとき、私たちは子供のようになって、それと気付かぬままに、神が私たちのために用意してくださっていた、「神の国」を受け入れたのです。

今日の福音のイエスのみことばによって、私たちはあらためて、今私たちがその中に生きる現実が、イエスが私たちにもたらそうとしておられる「神の国」の始まりであることを涙のうちに悟ることが出来るのです。そのためにイエスはこの現実を生きる私たちに「初めからそうであったのではない」と語りかけてくださるのです。

イエスが私たちに指し示してくださる「神の国」は私たちが今その中に生きている私たちの現実から離れてどこかにあるものではありません。私たちが経験したあの初めの日に、私たちが子どものようになって受け入れた、今私たちが生きている現実の中に「神の国」があるとイエスは言われるのです。子供のようになって、あの初めの日に私たちが受け入れたはずの、今わたしたしたちがそれを生きている私たちの現実の中で私たちは十字架のイエスと出会うのです。

十字架の道を行かれるイエスと出会うことによって、そのイエスに教え諭されることによって、私たちは自分が生きる今の現実が、神が私たちのために用意してくださっていた、イエスに従う十字架の道であることを悟ることが出来るのです。そこに、イエスが私たちにもたらしてくださった「神の国」があるのです。イエスがもたらしてくださった「神の国」は十字架の道に行くことによって、私たちの前に開けてくるのです。十字架の道を最後まで歩みとおされたイエスが私たちに教えていてくださることは、私たちが子供のようになって、あの初めの日に受け入れたはずの今の私たちの現実の十字架が私たちへの神のみ旨であり、それを受け入れ歩みと通すことが「神の国」への道であるということです。

今日、新たにイエスのみことばに促されて、私たちの初めの日に戻って、あの初めの日の受け入れたはずの今の私たちの現実を、それこそが十字架のイエスに従う「神の国」への道であることを受け入れることが出来る恵みを願いたいと思います。イエスのみことばの恵みによって、私たちは幾つになって初めの日に戻ることが出来るのです。真実私たちがあの初めの日に戻ることが出来るなら、その日から始まった今の私たちの現実を、十字架のイエスに従う「神の国」への道であると受け止めなおすことが出来るのです。そのような恵みを、新たな力を願いあって、十字架のイエスの祭壇のもとで今日のミサをおささげ

したいと思います。ここに集う私たち一人一人を十字架のイエスが抱き上げて
くださり、祝福してくださるよう祈り求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高